



吃音とは

言いたいことは頭に浮かんでいても、話す際にことばが滑らかにでてこない状態のことを「吃音」と言います。

以前は「どもり」と言われていましたが、差別的意味合いが強いことから「吃音」と言われるようになりました。

原因

吃音に関する研究は、様々な観点から行われていますが、主な原因は、未だ特定されていません。複数の要因が、関与すると考えられています。

分類

発達性吃音：幼児期に発症
獲得性吃音：青年期以降に発症

※9割は「発達性吃音」とされています。

発症率

吃音発症のほとんどが、2~5歳に始まり、幼児の約5~8%に生じると言われています。なかには何も治療せず自然に治るお子さんも約7~8割いるとされています。



指導について



幼児期



幼児期には、「ぼく ぼく ぼく」「あの一」「えーと」などのような話し方をするお子さんが、多くみられます。その為、吃音かどうかを見分ける必要があります。幼児期の指導では、ご家族や周囲の方への接し方の指導（環境調整）を行います。家庭・保育園・幼稚園・保健所・医療機関との連携が必要となります。



学童期



低学年では、環境調整に加えて、滑らかな話し方を促進する指導を行います。滑らかな話し方の指導を行い、流暢に話せる体験を増やし、自己肯定感を高められるような働きかけを行います。家庭・学校・医療機関との連携が必要となります。



思春期（中高生）



思春期の相談窓口が少なく、1人で問題を抱え込みやすい時期です。吃音に関する正しい情報提供と、具体的な目標（クラスでの発表、受験の面接試験）に向けての発話指導や認知面への指導を行います。家庭・学校・医療機関との連携が必要となります。



青年期以降



大学生になるとゼミでの発表や就職活動と心理的な負担が大きくなります。社会人では電話対応や窓口業務など個々による問題も様々です。この時期の指導としては、直接的な発話指導や吃音に対する恐れや回避を緩和する指導などを行います。本人の吃音に対する考えを聞き、十分な話し合いを通して、コミュニケーション態度が前向きになれるよう働きかけていきます。



心理的・身体的側面

- ◇ 事前にももりたくないと予測し、話す事への不安や恐怖を感じる事があります。
- ◇ 発話と同時に、体の一部を動かす事があります。



関わり方のヒント

- 【子どもの話を聞くときは】
- ×：「もう一度言って」
 - ×：「ゆっくり話して」
 - ×：「緊張しないで」
 - ☆ 話し方ではなく子どもの話す内容に耳を傾け、子どもの気持ちに寄り添いことばやうなずきで伝えましょう。



- 【子どもに話しかけるときは】
- ☆ 大人がゆっくり目に、短く分かりやすい文で話すようにしましょう。
 - ☆ 子どもが話し終えてから、少し間をおいて話し始めましょう。